

# GSI Newsletter

G S I ニ ュ ー ス レ タ ー No. 11 2005/8

## Contents

### 産業技術総合研究所 平成17年度一般公開報告

- ・地質標本館特別展  
「地質図の世界」の開幕
- ・地質標本館 特別講演  
「地質図の世界 - 人の暮らしと自然を  
結ぶ -」を聞いて
- ・科学教養講座  
「巨大地震と津波 - スマトラ型の地震は  
日本でも発生するか -」
- ・チャレンジコーナー  
「アナログ実験マジックで噴火の謎を  
考えよう」報告
- ・研究成果コーナー  
「地下水観測-地震予知をめざして-」報告

### 自治体総合フェア 2005 出展報告

### サイエンスキャンプ 2005 報告

### 国際地質調査所会議参加報告 全ロシア地質調査所にて、 平成17年6月13日～16日

### NHK 教育テレビ高校講座 地学 「日本周辺の地震活動」への取材対応

### 新人紹介

### スケジュール

## 産業技術総合研究所平成17年度一般公開報告

今年も産業技術総合研究所の一般公開が7月23日に開催されました。当日は曇り空で猛暑もなく、コンディショ的に非常に恵まれ、夏休み開始早々と言うこともあってか、最終的な来場者数は5240名を記録しました。

以下に地質調査総合センター関係の企画についてのレポートを掲載します。なお、産総研一般公開全体の報告は、産総研ホームページ  
[http://www.aist.go.jp/aist\\_j/event/ev2005/ev20050723/old\\_ev20050723.html](http://www.aist.go.jp/aist_j/event/ev2005/ev20050723/old_ev20050723.html)  
をご参照ください。

### 地質標本館特別展「地質図の世界」の開幕

利光 誠一（地質情報研究部門）・谷田部 信郎（地質標本館）

7月23日の産総研一般公開にあわせて、地質標本館1階ホールで標記の特別展が開催されました。この日は特別展の開催初日ということで、この特別展の企画を中心となって進めてきた地質情報研究部門の松浦浩久・宮地良典・吉川敏之の3氏および関係者が展示パネルの前に立ち、来館者に対して解説を行いました。展示内容は、「地質図の始まり」、「地形と地質の密接な関係」、「人の暮らしと地質の関係」、「防災のための地質図」、「豊かな暮らしのための地質図」、「地質図に地球変動を読む」、「地質調査から地質図のできるまで」、「地質図の入手方法とインターネット」という8つのテーマで構成され、1815年に出版されたイギリスの世界最古の地質図や、日本が近代工業国家の建設をめざしていた頃の1882年に地質調査所が調査・出版した福岡県の炭田地質図などの歴史的な地質図のほか、最近出版されているいくつかの地質図を使い、地質図の歴史や読み方・活用の仕方などをやさしく解説しています。中でも、1988年発行の「筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図」を拡大して床面にはった展示コーナーでは、つくば市周辺地域に住む方々の関心を誘い、自分の家がどこにあり、その地盤はどうかなどについて解説の職員から熱心に話を聞く姿が多く見られました。

また、特別展の開幕にあわせて、活断層研究センターの関口春子氏による講演会「関東平野の地震動」が地質標本館映像室で開かれました。この中では、関東平野の地下構造と地震が起きた時の地震動との関係などがやさしく解説されました。地震は自分達の生活に密着した問題であるだけに、講演終了後に活発な質疑がなされ、将来予想される東海～南海地震が起きた場合の関東平野での地震動に関する質問なども寄せられました。

当日は2000人近い方々が地質標本館を訪れましたが、終了した午後4時半頃に比較的大きな地震があり（東京などで震度5強を記録）、話題の尽きない1日となりました。なお、特別展「地質図の世界」は9月25日まで引き続き地質標本館で開催されていますので、ぜひ見学においで下さい。



## 地質標本館 特別講演「地質図の世界 - 人の暮らしと自然を結ぶ -」を聞いて

脇田 浩二 (地質情報研究部門)

上記講演会が、産総研一般公開日である7月23日11:30-12:30に、共用講堂大会議室で開催された。この講演会は、同日から9月25日まで行われる地質標本館特別展「地質図の世界 - 人の暮らしと自然を結ぶ -」のオープニングを飾る特別講演会であった。

講師の小玉喜三郎氏は、現在は産業技術総合研究所の副理事長の要職にあるが、旧地質調査所（現：地質調査総合センター）において、所長を務め、若き日には関東山地で地質調査を実施し地質図を作成していた研究者であった。特に房総半島周辺における新生代の地質構造とテクトニクスの研究分野では、優れた業績を残されてきた。最近では、オーム社から「見方、使い方地質図」を出版し、一般への地質図の普及に尽力されている。

このような経歴を持つ小玉氏であるから、地質図を説明するのはお手の物であり、わかりやすい講演が行われるのは、自明であったが、多くの一般市民を含む聴衆の前でどのような話をされるのか、興味津々であった。

話の前半は、つくば市周辺の地質の話であった。普通の「地質図の説明」のように、そもそも地質図とはなんぞや？とか、地質図はこうして作る、こうして読むとか、HOW TO ものの本を読むような話の展開は一切なかった。多くの聴衆がつくば市およびその周辺の一般の方々、もしくは地質を専門としていない研究者とその家族といった方々であることを想定し、つくばの町や筑波山といった非常に身近な題材を元に地質図や地質の話を展開していった。産業技術総合研究所やその周辺、多くの住民が住む並木・竹園・松代といった地域の地質図（筑波研究学園都市及び周辺地域の環境地質図）を拡大し、色分けした地域の地層の違いなどを丁寧に解説し、生活の場の地下の地質にグッと興味を引き寄せた。

続いて行われた筑波山の地質の説明では、最近実際に撮影に行かれた山の様子や岩石の露頭などの写真が示され、この講演への並々ならぬ意欲が感じられた。筑波山では平面図だけではなく、断面図を示し、地質図が地下深くまでの三次元的な地質情報を含むことを分かりやすく紹介していた。

後半は、関東山地のガス田の話になった。小玉氏が若き日に調査を行ってきた研究成果を踏まえて、地質調査の成果として得られた一般にはあまり知られていない身近な天然資源の存在をわかりやすく紹介していた。詳細な地質調査の結果地質図上に示された背斜部には、天然ガスが蓄積されており、現在もパイプラインを通じて、関東周辺へ届けられているらしい。

約1時間の講演はあっという間に終わり、小玉氏が意図した地質図や地質情報を一般の人々にも身近なものにするという試みは、十分成功したと思われる。講演のあとの質問においても、自分の住んでいる場所の地質は水色で示された粘土層であるけど、大丈夫でしょうか？といった自分の生活に密着した質問が相次いだ。これらの質問にも、小玉氏は専門家の立場から相手に不安を与えないように丁寧に回答していた。

最後に、この講演は、わかりやすい図の作成に一部協力した地質調査情報センターの職員によって、小玉氏のわかりやすい語り口と説明が支えられていたことを紹介しておきたい。また、講演時に配布された「地質図の世界」のわかりやすいパンフレットを作成した地質情報研究部門の研究者の努力も讃えたい。

## 科学教養講座

### 「巨大地震と津波 - スマトラ型の地震は日本でも発生するか -」

佐竹 健治 (活断層研究センター)

7月23日の産総研一般公開の科学教養講座で、「巨大地震と津波 - スマトラ型の地震は日本でも発生するか -」というタイトルで約1時間の講演を行った。

講演ではまず、地震や津波はどうして起きるか、震度とマグニチュード、地震の頻度など地震に関する一般的な事項を説明した。次にスマトラ沖地震とインド洋の津波に関して、産総研で行った現地調査結果や、津波警報システムについて紹介した。最後に、江戸時代にアメリカや日本で起きた巨大地震と題して、産総研で行っているカスケード沈み込み帯や北海道の太平洋岸での古地震調査研究について紹介した。

聴衆は約140名で、中会議室が満席となった。小学生

からお年寄りまでの幅広い年齢層で、皆熱心に聞いており、講演後に、地震の被害想定などについて幾つかの質問が出た。講演終了の約1時間後に、千葉県でM6.0の地震が発生、東京都内で震度5強を記録した。

なお、講演発表内容については、活断層研究センターのウェブサイトでご覧・ダウンロードできる。

<http://unit.aist.go.jp/actfault/event2005/index.html>

## チャレンジコーナー

### 「アナログ実験マジックで噴火の謎を考えよう」報告

高田 亮（地質情報研究部門）



溶岩流のアナログ実験の例。

火山噴火を題材にして地球科学の楽しさを体験してもらおうという目的で、日頃親しんでいる材料と道具を持ち寄って、自然現象を縮小したアナログ実験を紹介した。世の中は数値計算が主流であるが、一般の人にはブラックボックスが多すぎる。アナログ実験は、サイエンスの基礎を含んでおり、理科教育の宝庫である。当日は1時間おきに5回実験を行った。まえもって実験の前に噴火のビデオを見せておいた。噴火の原因となる地下のことは直接見えないので、ゼラチンを地球に、油をマグマにみたてた、マグマの移動から割れ目噴火までを理解するシースルー実験をはじめに公開した。次に、富士山の5万分の1の立体模型の上に、溶岩にみたてた、小麦粉と染料をエタノールで溶かした溶液を子供に流してもらい、溶岩流

の流れ方を観察してもらった。エタノールは蒸発するので、残った小麦粉があたかも固まったようになるのである。この実験は、直感的に分かりやすく小学生には一番うけた。最後に、20万分の1地形図を広げ、偏西風の代わりに扇風機の風を使い降下火砕物の拡散堆積実験を子供にってもらった。地質標本館でも、展示中心ではなく、このような体験型のアナログ実験が常時できるようになればよいと思った。

<http://staff.aist.go.jp/a-takada/05July23.html>

## 研究成果コーナー「地下水観測 - 地震予知をめざして -」報告

松本 則夫（地質情報研究部門）

7月23日に行われた産総研一般公開において、地震地下水研究グループでは、「地下水観測 - 地震予知を目指して -」と題して、「話題の広場 - 産総研の研究成果の紹介 -」ブースで研究紹介を行いました。

研究展示ブースでは、マグニチュード8程度のいわゆる「東海地震」が起こる可能性があること、産総研・地質調査総合センター（GSJ、AIST）では、「東海地震」の想定震源域付近で15本の井戸の地下水位を観測していること、さらに、もし「東海地震」の前に想定されているゆっくりとしたすべり（前兆すべり）が起こった場合に、観測している井戸の地下水位がどのように「有意な変化」となるかということ、さらに、気象庁が発表する東海地震に関する情報の内容とそれに対してGSJ、AISTがどのように貢献するか、などについて説

明しました。

なお、発表の内容には直接には関係しませんでした。来訪された方の近辺（主に茨城県・千葉県）での地震活動の状況についての質問も多数ありました。それに対しては手持ち資料を持ち込み、説明を行いました。

用意した100部あまりの説明資料はすべてなくなり、また、熱心に質問される方もいらっしゃるなど、地震研究・地震予知研究にたくさんの方が興味を持たれていることを実感しました。

# 自治体総合フェア 2005 出展報告

下川 浩一（地質調査情報センター）



地質調査総合センターの展示ブース

「自治体総合フェア 2005」は、7月13日（水）～15日（金）に東京ビッグサイト（東京国際展示場）の西展示棟・西1ホールにおいて、『自治体ブランドの創造と発信に向けて』をテーマに開催された。この会場では本フェアのほか、病院・福祉施設住環境フェア、在宅ケア 2005、及び国際モダンホスピタルショウ 2005 が同時開催されており、会期3日間で21,800人の来場者があった。

地質調査総合センターは、本フェアにブース出展し、地震や火山噴火など、突発的地質災害発生時の緊急調査・研究とその成果や、安全な水資源の確保に対する取組、地球科学図類の編集・出版、及びそれらの電子化整備推進等について、ポスターやパンフレット、映像等で紹介した。

また、初日の午後には、自治体ワークショップの枠で、関西センターの寒川 旭が、「21世紀の大地震を考える」というタイトルで講演を行った。講演では、地震考古学という

新しい学問が、海溝型地震の繰り返し周期や規模を明らかにする上で果たしてきた貢献がわかりやすく解説され、自治体関係者や防災関係企業の方の関心を引きつけていた。

さらに、2日目の午後には、危機管理セミナーの中で、活断層研究センターの穴倉正展が、「スマトラ沖津波&津波シミュレーション」というタイトルで講演を行った。講演では、北海道東部の古地震研究の成果などを例に、スマトラ級の地震や津波が日本でも起こりうるということがわかりやすく説明され、その場にお集まりの100名程度の自治体関係者及び防災関係企業の方は、たいへん興味を持って聞いておられた。

しかしながら、展示ブースでは、自治体総合フェア以外のイベントに参加された医療関係者の方などがそのまま通過されるなど、一般の多くの方の興味を引くには至らなかった。今後は、一般の方にも興味を持っていただけるような展示の工夫が必要だと実感させられた。

## サイエンスキャンプ 2005 報告

川辺 禎久（地質調査情報センター）・中川 充（北海道産学官連携センター）

日本科学技術振興財団が主催し、産総研北海道産学官連携センター・地質調査総合センターが行う恒例のサイエンスキャンプが7月25日から27日にかけて行われました。

今年の参加者は、全国から集まった高校1年生4名、2年生6名の計10名。25日昼過ぎに新千歳空港で集合後、まずは札幌市月寒の産総研北海道センターに移動し、北海道センター所長吉田さんの挨拶に続き、ゲノムファクトリー研究部門副部門長の扇谷さん、糖鎖工学研究センターの清水さん、メタンハイドレート研究ラボの海老沼さん、キャンプに同行するゲノムファクトリー研究部門の安野さんにより、各

実験室、遺伝子組み換え植物温室の見学、メタンハイドレートの実物燃焼実演などを行いました。その後、宿泊先である休暇村支笏湖に移動、包括協定の一環として特別参加の北海道大学の川中光弘教授と合流しました。夜のミーティングでは川中教授と中川 充による火山と有珠山についての講義があり、翌日の見学に備えました。

翌26日は、キャンプのハイライトである昭和山登山と、2000年有珠山噴火西山火口の見学です。三松正夫記念館館長の三松三朗さんの案内で、昭和山屋根山頂上まで登り、押し上げられた旧河床堆積物、天然煉瓦、貫入したデイサイ

ト溶岩などを観察しました。生徒さんたちは、慣れないハンマーを使って、貫入したデイサイト溶岩を探していました。2000年有珠山噴火西山火口の観察では、噴気に捲かれたり、いまだ100度近い地温を示す地熱地帯、断層群、傾き破壊された家屋を目の当たりにし、初めて体感する自然の力に圧倒されたようです。夜には、川辺による三宅島2000年噴火の解説、安野さんの遺伝子組み換え植物のお話のほか、北海道センター金子さんによる、地元民ならではの北海道講座も開かれ、おおいに盛り上がりました。

最終日は、伊達市の消防防災センターを訪れ、防災体験施設、有珠山に関する展示などを見学しました。地元新聞社の取材も受け、29日の記事中には「噴石採取が楽しかった」

との生徒の感想が掲載されました。その後、千歳市に移動し、昼食の後、閉講式が行われ、生徒一人ひとりに修了証書が渡されました。

台風接近の影響もほとんどなく、無事キャンプが終了したのはなによりでした。今回はややおとなしめの生徒さんが多かったのですが、研究現場や実物に触れることで、自分たちの進路などにながしかのヒントを得てくれたものと思います。

最後に、キャンプを支援していただいた、北海道センター前田さん、中川啓子さん、羽坂さん、日本科学技術振興財団の橋山さんに感謝いたします。



西山火口での参加者による記念撮影。

## 国際地質調査所会議参加報告 全ロシア地質調査所にて、平成17年6月13日～16日

佃 栄吉（地質調査総合センター代表）

平成17年6月13日から16日にかけて、サンクトペテルブルク市（ロシア）において、国際地質調査所会議が開催され、筆者が参加したのでその概要を報告する。この会議はロシアの地質調査代表機関である「全ロシア地質研究所（VSEGEI）」において開催された。この会議については、本年4月25日に、同所長のペトロフ（O.V. Petrov）氏がレドフスキフ（A.A. Ledovskikh）連邦地下天然資源庁（局）長官を伴って地質調査総合センターを訪問して直接強い要請をうけたこと、従来、ロシアとは組織的な関係が希薄であったこともあり、将来的な連携の可能性を探ることも視野に入れて参加することとなった。

主催者側から示された今回の会議の主な目的はCIS及びその他の諸国が、現在進行中の中央アジア及び周辺地域の地質アトラスなどに関する国際プロジェクトの取組みの基で、協力の内容の再確認と技術的問題解決の方策を検討することであった。参加した各国は、カザフスタン、ウクライナ、ベラ

ルーシ、ラトビア、グルジア、アルメニア、キルギス、タジキスタン、アゼルバイジャン、ウズベキスタン、チェコ、ドイツ、カナダ、アメリカ、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、中国、モンゴル、日本、韓国、インドで、開催国のロシアを含め23カ国であった。日本からは佃に加えて石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）の大塚理事が招待参加されていた。会議では各国がそれぞれ現在進行中の国際プロジェクトや研究動向について報告し、佃からは地質調査総合センターの研究戦略概要とアジアを中心とする国際共同研究について発表した（写真1）。これらの報告を受け、様々な国々の組み合わせによる複数の協力プロジェクトについて合意し、議事録をとりまとめた。協力プロジェクトの内、日本が協力するとしたものは、すでにCGMWプロジェクトとして進めている500万分の1スケールのアジア地質図計画（IGMA5000）の確認であった。ロシア側が特に力を入れていたものは、CIS諸国のエネルギー・資源を強く

意識した連携の強化と北極海及びその周辺の地質情報とりまとめへのイニシアティブの発揮であった。後者については北欧諸国、カナダ、アメリカとの連携であり、簡単ではない協力案件と考えられ、国連のIPY（International Polar Year 2007-2008）と連携した活動に位置づけながら慎重に進められることになる。今回の会議に対して、カナダは Irwin Itzkovitch 地球科学担当副大臣と J. Murray Duke カナダ地質調査所長が参加し、同時に開催された International Economic Forum での鉱業法の改正にかかわる会議に参加した人も加えると総勢 20 人を上回る大代表団を送り込んでおり、非常に積極的な姿勢が印象的であった。

VSEGEI は GSJ と同じく 1882 年に設立され、現在の研究所が創建された 1914 年にはニコライ二世国王が訪れ盛大

なセレモニーが行われたそう（写真 2）。現在、建物は 6 年計画での改修中。正面の道路も工事中であり、出入りは研究所の裏の研究所が所有経営しているホテルの玄関を使用した。一般にも開放されており、VSEGEI で仕事をするときには便利であろう。改修は後 1 年で終了するとのことだった。



写真 1 全ロシア地質調査所 (VSEGEI) 内の大会議場で開かれた会議の様子。アジアからの、日本、中国、韓国、インド、モンゴルを含め、23 カ国の参加



写真 2 白と青を基調とした VSEGEI の内装。1914 年に建物が完成したときにはニコライ二世国王がお祝いに駆けつけたという。



写真 3 ロシア鉱物資源開発の殿堂、1773 年設立のペテルスブルク鉱山大学。

## NHK 教育テレビ高校講座 地学「日本周辺の地震活動」への取材対応

七山 太（地質情報研究部門）

最近マスコミでは、小中高の教育現場での理科離れが社会問題として大きく取りざたされている。特に、高校地学に関しては、教員の採用者数の減少や地学カリキュラムそのものの削減も相まって、地球科学（地学）への関心度の低下は差し迫った状況にあるといえる、

これは特に我々のような地質調査を生業としているものにとって看過出来ない問題である。凡に、今年度 5 月に発足したばかりの日本地球惑星科学連合も、本年 7 月下旬に、連

合として高校地学カリキュラム改善に関する提言を文科省に提出する予定と伝え聞く。私も一研究者として、既存の知識を教材とし、地学教育に貢献出来ないものか？と常日頃から考えていた矢先でもあった。

2005 年 6 月 24 日（金）～ 27 日（月）、NHK 教育テレビ高校講座「地学」の番組講師をされている茨城大学教育学部 伊藤 孝助教授から依頼を受け、「17 日本周辺の地震活動」編の現地ロケの為に北海道東部に出張した。この番組

は文字通り高校生対象の教育番組であるが、現状の理科離れを考慮し、漠然と映像として見るだけでも視聴者が楽しめるものを作るため、NHKの中村一夫ディレクター、伊藤 孝氏と事前に協議を繰り返し、台本づくりの段階から参画した。番組のストーリーは、以下の通りである。

2004年スマトラ地震によって生じた巨大津波の被災映像を見て、平野麻樹子レポーターと伊藤 孝氏が驚嘆し、同じような巨大津波災害が本邦でも過去に起こっていないか文献を調べてみることにした。その結果、北海道東部太平洋沿岸地域に、巨大津波の痕跡が存在するとの情報を得る。

彼らはまず北海道東部で最も古い古文書「日鑑記」が保管されている、厚岸町国泰寺を訪れる。ここで平野・伊藤は1843年（天保十四年）にこの地を襲った最古の地震津波の記述を拜見する。この時、厚岸海事記念館の熊崎農夫博学芸員から、隣の浜中町の霧多布湿原で、地質調査総合センターの研究者（七山）が1843年の津波痕跡の調査を行っているとの情報を得て、早速現地に移動する。

霧多布湿原での調査中の七山と平野・伊藤が出会い、七山

が彼らに地質学的手法を用いた津波痕跡の研究意義を熱く語る。最初に海岸線から500m以内の限られた地域にしか保存されていない1843年の津波痕跡の存在を示し、「日鑑記」の記述内容の正当性を指摘する。さらに、日本人の祖先がこの地に入植する1800年代以前に、海岸から数千m以上離れた内陸まで、400-500年周期で繰り返しこの地を巨大津波が襲っていた事実を示す地層を検土杖で採取し、その最後の巨大津波イベントが17世紀中頃に発生した事を力説する。この検土杖による掘削作業を平野・伊藤も実体験し、“この様な簡単な作業で、この地の過去4000年間の地震津波の履歴が分かってしまう”ことに対し、大きく感動する。番組では、これらの現地ロケに加え、活断層研究センターの佐竹健治氏の作成した霧多布湿原における津波遡上アニメーションや霧多布湿原の深さ3m分のはぎ取り標本の紹介を織り込む予定である。

最後に、再びロケ地の映像に戻り、高台にある霧多布湿原センターからの太平洋に向かった遠景を示し、これらの巨大地震津波が2004年スマトラ地震のような巨大地震で発生した可能性について伊藤氏が概説し番組を締めくくる。

なお、今回収録された番組は今年度7月29日にテレビ放送され、再放送も含めて今後3年間、高校講座「地学」の番組で使用される予定となっている。



写真1 霧多布湿原での番組収録中の一コマ。左から七山 太、伊藤 孝氏、平野麻樹子レポーター。



写真2 霧多布湿原での番組収録中の一コマ。検土杖で採取された1843年津波の痕跡を説明中。

## 吉岡 秀佳

(よしおか ひでよし, 地圏資源環境研究部門)

4月1日付けで地圏資源環境研究部門有機地化学研究グループに採用になりました吉岡秀佳です。産総研には、2003年から特別研究員(1号非常勤)として2年間在籍していましたので既にご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、このたび任期付若手研究員として新たに採用されましたので改めてよろしくお願いたします。



これまで主に有機地球化学の研究に関わってきましたが、産総研に来てからは、微生物の専門の方々と共同で研究を進めています。これからは、地球システムにおける物質循環という視点に立って、メタンハイドレート鉱床や天然ガス田における微生物メタンの生成プロセスを解明する研究に取り組みたいと考えています。この課題には、地球科学的手法のみならず、微生物学的手法も使い総合的に取り組むことが必要なので積極的に異分野の方と交流し、多様性に富む産総研ならではの分野横断的な研究を進めたいと考えています。

## スケジュール

7月23日～9月25日	地質標本館特別展示「地質図の世界 - 人の暮らしと自然を結ぶ -」 (つくば市, <a href="http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2005/2005chizu/chizu.html">http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2005/2005chizu/chizu.html</a> )
8月26日	地質標本館普及講演会 アスベスト講演会 (つくば市, <a href="http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2005/050826kouen/kouen.html">http://www.gsj.jp/Muse/eve_care/2005/050826kouen/kouen.html</a> )
8月26～29日	第四紀学会 2005 年大会 (松江市, <a href="http://www.soc.nii.ac.jp/qj/QR2home.htm">http://www.soc.nii.ac.jp/qj/QR2home.htm</a> )
9月5～9日	International Conference 《Ecosystems of Mongolia and Frontier Areas of Adjacent Countries: Natural Resources, Biodiversity and Ecological Prospects》 (モンゴル・ウランバートル, 問い合わせ先: <a href="mailto:ibot@mongol.net">ibot@mongol.net</a> / <a href="mailto:scolab@magicnet.mn">scolab@magicnet.mn</a> )
9月8～9日	全地連「技術 e-フォーラム 2005」 (仙台市, <a href="http://www.zenchiren.or.jp/up/forum_ippan.html">http://www.zenchiren.or.jp/up/forum_ippan.html</a> )
9月13～20日	CCOP 第42回年次総会および第46回管理理事会 (中国・北京, <a href="http://www.ccop.or.th/pdf/events/2nd_circular_42AS&amp;46SC_dhn.pdf">http://www.ccop.or.th/pdf/events/2nd_circular_42AS&amp;46SC_dhn.pdf</a> )
9月17～19日	日本地理学会 2005 年秋季学術大会 (水戸市, <a href="http://www.soc.nii.ac.jp/ajg/2005/0225.html#1">http://www.soc.nii.ac.jp/ajg/2005/0225.html#1</a> )
9月18～20日	日本地質学会第112年学術大会 (京都市, <a href="http://www.geosociety.jp/2005kyoto-HP/kyoto-index.html">http://www.geosociety.jp/2005kyoto-HP/kyoto-index.html</a> ) 同時開催: 地質情報展 2005 きょうと一大地が語る5億年の時間(とき) - ( <a href="http://www.aist.go.jp/aist_j/event/ev2005/ev20050918.html">http://www.aist.go.jp/aist_j/event/ev2005/ev20050918.html</a> )
9月23～24日	日本岩石鉱物鉱床学会 2005 年学術講演会 (松山市, <a href="http://www.soc.nii.ac.jp/jampeg/2005nenkai_j.html">http://www.soc.nii.ac.jp/jampeg/2005nenkai_j.html</a> )
9月26～28日	2005 年度日本地球化学会年会 (沖縄県西原町, <a href="http://www.geochem.jp/nenkai/index.html">http://www.geochem.jp/nenkai/index.html</a> )
9月28日～10月1日	第118回地球電磁気・地球惑星圏学会総会ならびに講演会 (京都市, <a href="http://www.kurasc.kyoto-u.ac.jp/sgepss/soukai.html">http://www.kurasc.kyoto-u.ac.jp/sgepss/soukai.html</a> )
10月5～9日	日本火山学会 2005 年秋季大会 (札幌市, <a href="http://www.soc.nii.ac.jp/kazan/J/doc/2005fallmeeting.html">http://www.soc.nii.ac.jp/kazan/J/doc/2005fallmeeting.html</a> )
10月19～21日	日本地震学会 2005 年秋季大会 (札幌市, <a href="http://zisin.or.jp/meeting/2005/">http://zisin.or.jp/meeting/2005/</a> )

このニュースレターは、地質調査総合センターのホームページでバックナンバーを含めご覧になれます。

<http://www.gsj.jp/gsjnl/index.html>

## 編集後記

川辺 禎久  
(地質調査情報センター)

夏休みももうまもなく終わりとはいえ、蝉の声もまだまだ賑やかな暑い日々が続いています。今回のニュースレターは、そんな暑い夏の各種一般向けイベント特集のような趣でお送りします。

七山さんが出演されたNHK教育テレビ高校講座「地学」には、実は産総研からもう一人、地質情報研究部門の吉川さんも「地質図とは何か」というコーナーで取材を受け、出演されています。理科離れ、学力低下となにかと騒がしい世の中ですが、サイエンスキャンプ参加の高校生の純粋な好奇心を見るにつけ、産総研地質調査総合センターももっと積極的に、普及啓蒙活動に取り組む必要があるなあと痛感した夏でした。

GSJ Newsletter No.11 2005/8

発行日: 2005年8月26日

発行: 独立行政法人 産業技術総合研究所  
地質調査総合センター

編集: 独立行政法人 産業技術総合研究所  
地質調査情報センター  
村上 裕 (編集長)

川辺 禎久 (編集担当)  
志摩あかね (デザイン・レイアウト)

〒305-8567

茨城県つくば市東1-1-1 中央第7

TEL: 029 - 861 - 3687

Fax: 029 - 861 - 3672

ホームページ: <http://www.gsj.jp>